

## 保育士・教員養成課程における楽典指導Ⅱ ～「音楽Ⅰ」のピアノ表現を深めるために～

### Teaching Musical Grammar to Students of Childcare Education for improvement in Their Piano Skills and Music Expression in “Music I”

矢内 淑子<sup>1)</sup>、酒井 国作<sup>2)</sup>

Toshiko Yanai<sup>1)</sup> and Kunisaku Sakai<sup>2)</sup>

1) 愛知東邦大学教育学部、2) 愛知東邦大学非常勤講師

筆者らは、保育士・教員養成機関における教科教育技能に関する科目「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」の楽典指導の効果的な教授法について研究してきた。本論は、「保育士・教員養成における楽典指導Ⅰ～『音楽Ⅰ』・『音楽Ⅱ』のピアノ表現を深めるために～」の継続研究であり、「バイエルの楽譜を読む基礎知識の習得」「バイエルの楽譜の基本的な音楽内容を理解し表現に生かす」ことを目標にして検討した結果、昨年同様①ピアノ学習の前提として必要な読譜の基礎知識の理解を助け、②学生の音楽的な興味・意欲をある程度引き出し、③音楽表現をする上での前提となる楽譜の理解を促すことができたものの、学生のピアノ技術や音楽への興味、音楽経験の差異などの個別レベルへの対応、リズム的な要素についての試みは不十分であることが明らかになった。さらにより多くの音楽体験を受け、スキルアップを図る教材研究が必要である。バイエル以外のメソードや、子どもの歌などの生きた教材からバイエルに欠けている音楽要素を取り入れたり、現代の学生が興味を引く音楽の中に素材を求めるなど、より楽譜や音楽を身近に感じてもらい、必要な音楽スキルに役立てる工夫をしたい。

#### はじめに

本論は、「保育士・教員養成における楽典指導Ⅰ～『音楽Ⅰ』・『音楽Ⅱ』のピアノ表現を深めるために～」<sup>[1]</sup>の継続研究である。

2017年度前期「音楽Ⅰ」、後期「音楽Ⅱ」の授業では、ピアノの個人レッスンと楽典授業を45分毎に入れ替える形で実施した。「音楽Ⅰ」では、「バイエルの楽譜を読むことができる基礎知識を習得」し、「音楽Ⅱ」では、「バイエルの楽譜に表されている基本的な音楽的内容を理解してピアノ表現に生かす」ことができることを目標に掲げ指導した。その際、「楽典授業」では「バイ

エルの楽譜」に特化し、そこに付随する内容として関連する様々な音楽表現についての基礎知識・技術を指導するようにし、その学習を通してより効率的なピアノ学習ができるようにした。また、学生が教育・保育現場において、子どもの歌の弾き歌いや子どもの発達段階に適した楽曲を選び、さらには子どもの実情に合わせて移調を含む簡単な編曲など、具体的な「教育・保育の内容の方法」の習得につながる重要なスキルとなるように心掛けた。そうすることで、「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」で行う楽典の知識が保育を想定した音楽表現と有機的に結びつくことになる。

その結果、次のような成果が認められた。

- ① ピアノ学習の前提として必要な読譜の基礎知識の理解を助けることができた。
- ② 学生の音楽的な興味・意欲をある程度引き出すことができた。
- ③ 音楽表現をする上での前提となる楽譜の理解を促すことができた。

指導の際に配付した教材は、教員採用試験を受験する際の貴重な資料となり得たが、一方、学生のピアノ技術や音楽への興味、音楽経験の差異などの個別レベルへの対応は不十分な点があったと考える<sup>[1]</sup>。そこで、2018年度は、「音楽Ⅰ」のみで楽典指導を行うことし、「音楽Ⅱ」では、バイエルの楽譜に表されている基本的な音楽的内容を理解して、ピアノ表現に生かすことができるようにした。

したがって、本論では、2018年度の「音楽Ⅰ」の楽典指導の効果的な教授法について検討することとした。時間数が少ない中で効率的に必要な音楽知識を授けられるように、楽典指導教材を細部にわたり検討を加えながらカリキュラムを再構成し、授業を実施した。さらに、得られた結果は、2019（令和元年）年度から開始する再課程認定後の音楽関係授業の1年次に実施される「音楽基礎」の授業に反映していくこととした。

## 1. 問題の経緯

本学では、音楽に関係する授業として以下の科目が開講されている。

- ① 教育・保育の内容・方法に関する科目：「保育内容（音楽表現）」「音楽科教育法」
- ② 教科教育技能に関する科目：「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「音楽表現技術」「音楽Ⅲ」「総合表現技術」（一部）

1年次に履修する「音楽Ⅰ」では、教育・保育内容や方法を習得するための前提となる音楽的な基礎能力を育成することが求められている。これらの基礎能力は、中学校の教科書に書いてある内容程度ではあるが、中学では高校受験に関係のない教科は重視されない傾向があること、高校では芸術は選択制であり全員が履修しているわけではないうえに、多くの学校で1学年のみの履修であるといった事情がある。

また、昨年度入学した学生の高校での芸術音楽の選択者は有効回答数79人中32人、率にして41%にとどまっており、一昨年の62人中37名（60%）よりも少ない [図1]。ピアノやエレクトーン、オルガンなどの鍵盤楽器を習ったことがある者は有効回答者数79人中35人（44%）であるが、その中には本学への入学が決まってから習いだした学生も数名いる。このように音楽的経験

が不十分なまま入学した学生には、ピアノ学習の教材であるバイエルの楽譜の意味すらわからないものもあり、このような能力差のある集団に対してどのような指導をするべきかということは、本学のみならず多くの保育士・教員養成校で問題となっている<sup>[2][3]</sup>。

しかし、かれらに対して適切な音楽の基礎教育を施し、読譜能力を高め、音楽の構造や特徴について考える機会を与えることは、ピアノの技術の向上のみならず、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定子ども園教育・保育要領にある領域表現のねらいを達成し、将来保育者が子どもに音楽活動体験を授けるための前提として必要な音楽に対する興味の惹起を学生に促すことが期待できる<sup>[4][5]</sup>。さらに、「楽典の知識が保育を想定した音楽表現の文脈と切り離されているところに問題の本質がある」<sup>[6]</sup> に関して問題解決の糸口となることが期待できる。

このような状況のもと、「音楽Ⅰ」及び「音楽Ⅱ」の楽典の授業を実施した結果も踏まえ、より効率的に、楽典の知識が音楽表現と有機的に結びつき有効に働くように検討し、必要な音楽の基礎知識を授けられるよう、指導教材の細部にわたって検討を加えながら授業を実施した。

## 2. 「音楽Ⅰ」の授業目的と概要

音楽学習におけるピアノ演奏は、音楽を感得する方法として非常に有効であり、作品の音楽性を体感させるだけでなく、子どもに音楽を指導する際に必要となる音楽経験をも醸成させ、また具体的な音楽表現の手段を与えてくれる。そこで「音楽Ⅰ」では、楽典も取り入れながら、子どものための音楽活動を支える基礎技能としてのピアノ技術を学習させている。教材について賛否はあるが、本学は公立保育士試験課題になっているバイエル教則本を使用し、初心者でもこの教則本を修了することを目標とし、様々な演奏体験を通して豊かな音楽表現ができるように指導をしている。しかし、初心者においては、読譜の点で困難を感じている学生が多いのが現状であり、これを解決するために一昨年よりクラス授業をはじめている。

2018年度は、楽典の授業は「音楽Ⅰ」の時間においてのみ実施することとなった。これは昨年度「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」と通年で実施した成果を検討した結果として、ピアノ演奏の指導のための時間が十分にとれないという反省点から改善されたものである。楽典の授業は「音楽Ⅰ」の時間のみで完結できるようなカリキュラムを再検討することとなった。

指導時間数が大幅に変わっても、目標は変わりなく、昨年同様「バイエルの楽譜を読むことができる基礎知識の習得」「バイエルの楽譜に表されている基本的な音楽的内容を理解し表現に生かす」ことを目標とした。このように「楽典の授業」においては、「バイエルの楽譜」に特化し、そこに付随する内容として、関連する様々な音楽表現についての基礎知識・技術を指導するようにし、その学習を通してより効率的なピアノ学習に寄与することを心掛けた。同時に、本年度は特に学生が2年次に履修する「音楽表現技術」で、子どもの歌の弾き歌いをしたり、将来現場において児童の発達段階に適した楽曲を選曲したり、さらには児童の実情に合わせて移調を含む簡単な編曲をしたりといった、具体的な「教育・保育内容の方法」の習得につながるスキル育成の際に助けとなるような重要な内容の学習を、学生が自主的に深められるように教材を工夫した。

### 3. 授業の内容

楽典の授業の中で毎回プリントを配付して内容説明を行った。昨年度実施した課題プリントは、本年度は返却時に十分な解説の時間を取ることが難しかったため、回数を減らし、解説の資料の充実化を図ることで対応した。一方、授業で取り上げた内容より発展的な内容のプリントを同時に資料として配付し、意欲ある学生が自主的に学習内容を深められるよう配慮した。さらに、プリントの相互参照が可能になるようにインデックスも用意して、次年度以降の他の教科の履修の際にも資料として活用できるように心がけた。具体的には、以下に挙げるような10項目をピアノの技術指導とは別に実施した。

- ① 五線・譜表・音符など楽譜を読むために必要な基本的な記号の理解
- ② 音楽の3要素（メロディ・リズム・ハーモニー）の認識とそれを表す方法の理解
- ③ 音名や階名の理解
- ④ 音程についての理解
- ⑤ 長音階の概念と基本的な長音階・調号の理解
- ⑥ やや特殊な記譜法（連符や装飾音符など）と基本的な楽語の理解
- ⑦ 三和音と七の和音の構造の理解
- ⑧ 和声の基礎（和音の連結・カデンツ）の理解
- ⑨ 移調と転調・近親調の理解
- ⑩ コードネームの理解

昨年度は授業で取り上げた短音階については、現実的に弾き歌いのレパートリーとして短調の曲が少ない。「音楽表現技術」の授業で課題として取り扱う唱歌68曲のうち短調のものは「うれしいひなまつり」と「ちいさいあきみつけた」の2曲だけである。ことから[表1]、発展的内容として資料を配付するにとどめることとなった。また、音楽の形式・構造の理解についても具体的なエチュードの指導の中で扱わざるを得なくなった。

[表1] 「音楽表現技術」の授業で課題として取り扱う唱歌68曲

アイアイ	おぼけなんかないさ	サンタクロース	とんでったバナナ
あひるのぎょうれつ	おはながわらった	しゃぼんだま	とんぼのめがね
あめ	おべんとう	ジングルベル	はしるのだいすき
あめふりくまのこ	おほしさま	せんせいとおともだち	はをみがきましよう
ありさんのおはなし	おもいでアルバム	せんろはつづくよどこまでも	ふしぎなポケット
あわてんぼうのサンタクロース	おもちゃのチャチャチャ	ぞうさん	ぶんぶんぶん
いちねんせいになったら	おんまはみんな	たきび	まつぼっくり
いぬのおまわりさん	かぜさんだつて	たなばた	まめまき
うみ	かたつむり	ちいさいあきみつけた	めだかのがっこう
うれしいひなまつり	かわいいかくれんぼ	チューリップ	メリーさんのひつじ
おかあさん	クラリネットをこわしちゃった	ちょうちょ	もみじ
おかえりのうた	こいのぼり	てのひらをたいように	もりのくまさん
おしょうがつ	こおろぎ	てをつなごう	やぎさんゆうびん
おすもうちまちゃん	ことりのうた	てんとむし	やまのおんがくか
おつかいありさん	ゴリラのうた	とけいのうた	ゆきのペンキやさん
おててをあらいましょう	コンコンジャンのうた	トマト	ライオンのうた
おなかのへるうた	サツちゃん	どんぐりころころ	わにのうた

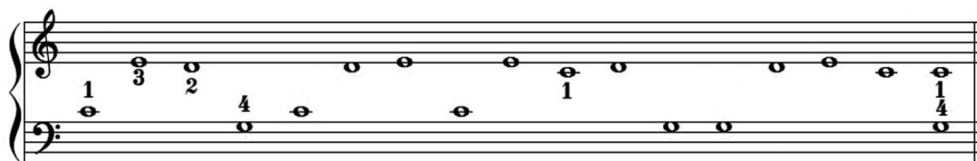
課題曲はすべて「こどものうた200」より<sup>[7]</sup>

一方で、本年度は授業時間中に楽譜を読んで実際に弾いてみる機会を大幅に増やした。これは、ピアノ演奏の指導に際し、その前提となる楽譜の読譜能力を効率的に向上させるための試みである。実施に指導に用いたものの一例を次に紹介する。

### ① 音楽の諸要素から一部を取り出した楽譜

楽譜を見てそこから音の高さやリズム、運指などを同時に読み取り、それを演奏につなげる一連の動作は初学者にとっては困難を伴う。このことはしばしば練習する楽譜中にカタカナで音名を記したり、拍を補助する線を楽譜中に多く書きこむ、といった作業で補われるが、却ってその情報に頼ってしまい楽譜そのものを読むことが疎かになる傾向がある。そこで、音楽の諸要素のうち一部分を取り出した楽譜を提示し、授業中にそれを実際に弾いてみるという機会を作った。[譜例1]はその一例である。

[譜例1]「教材例(1)」



この楽譜は音楽の重要な要素であるリズムや拍子といったものは取り除いてある。また強弱も記していない。学生は純粹に音の高さ（と運指）にだけ注意して楽譜に向きあいながら演奏体験をした。この楽譜ではその他に、学生はピアノ譜では上の段に書かれた音は右手、下の段に書かれた音は左手で演奏すること、上下で縦にそろえて書いてある音は同時に演奏すること、運指の指示に使われる指番号などを同時に学習した。

### ② 低音部譜表で書かれた楽譜

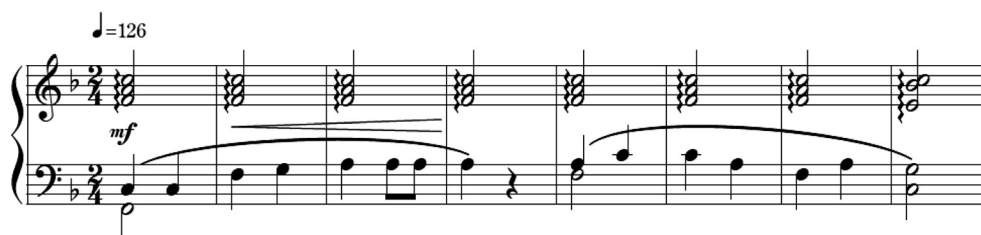
保育士や幼稚園教諭の採用試験には、しばしばバイエルが試験曲として課されるため、本学もピアノ学習にはバイエル教則本を教材として使用している。しかし、トンプソンやバーナム、バスティンといった他の初学者用のピアノ教則本では最初から高音部譜表と低音部譜表を併用する大譜表が使われているのに対し<sup>[8][9][10]</sup>、バイエルでは106曲ある練習曲の53番まで低音部譜表が使われていない<sup>[11]</sup>。「音楽表現技術」の授業で課題として取り扱う唱歌68曲は全て大譜表で伴奏譜が書かれており、低音部譜表の読譜を早く習得することが重要である一方、本年度「音楽Ⅰ」終了時点（期末試験）でへ音記号の出でこないバイエル53番以前を演奏した学生は全受験者79名中33名（約42%）であった。例年同様の傾向があるため、「音楽Ⅱ」以降の課題に円滑に取り組むために低音部譜表の読譜を早く始めておく必要がある。そこで本年は低音部譜表で旋律譜を提示し [譜例2]、これを実際に授業中に演奏することで低音部譜表の読譜能力を高めるようにした。

### [譜例2]「教材例(2)」



この楽譜においては、バイエル65番ではじめて学習するピアノの「指をくぐらせる練習」の予備練習をすることも意図している。また、この譜例は「たなばたさま」のメロディの一部であるが、実際のこの曲の伴奏譜は次の【譜例3】のようなものであり、学生は左手のメロディの演奏に苦勞することが予想される。譜例2の教材はその準備練習を兼ねている。

### [譜例3]「たなばたさま」(下総皖一作曲)



## 4. 調査方法と内容

### (1) 調査内容と結果

アンケート調査を5段階評価で行った。主な結果については次節以下に図表にて表示する。

### (2) 調査対象

「音楽I」を初めて受講する1年生約80名。調査は時期を変えて複数回行っているが、対象者が全く同一にはなっていない。なお、今回はジェンダーは区別せずに調査を行った。(人数の詳細は各データを参照のこと)

### (3) 調査時期

入学時、入学2か月後(6月上旬)及び4か月後(7月下旬)の3回行った。

## 5. 結果と考察

本調査では、まず本年度「音楽I」を履修した学生の音楽的経験を分析し、次に「楽典」の指導の成果として「ピアノ学習への楽典の貢献度」「楽典の基礎知識の定着度」という2つの観点から結果の検討を行った。

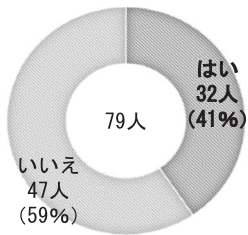
### (1) 本年度「音楽I」履修生の音楽的経験

【図1】は入学時に行った調査の結果である。高校時に芸術を選択した学生の割合は約41%と昨年よりも少なかった。本年度はさらに「音楽I」で学習するピアノの楽器経験の有無についても調べたところ、約44%の学生がピアノなどの鍵盤楽器を習った経験があると答えた。中

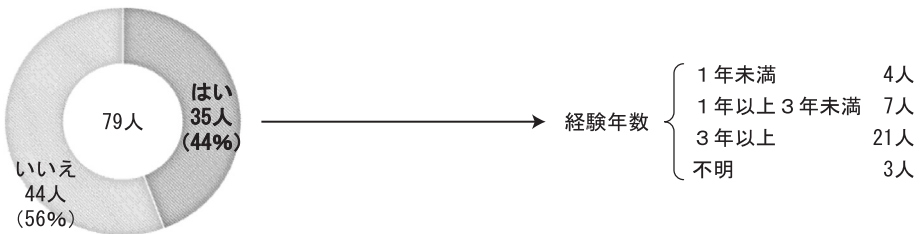
でも3年以上習った経験のある学生が21名おり、15年間習っているという学生もいた。一方、鍵盤楽器以外の楽器などによる音楽経験者は約11%にとどまった。その内容は多岐にわたるが、吹奏楽の経験者が多かった。

[図1] 「入学時のアンケート」

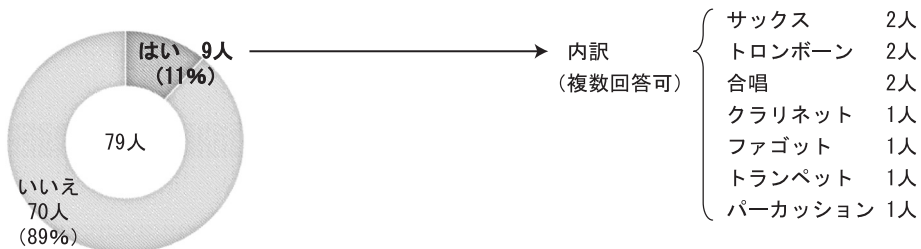
Q. あなたは高校で芸術に音楽を選択していましたか。



Q. あなたは今までにピアノやエレクトーン、オルガンなどの鍵盤楽器を習ったことがありますか。



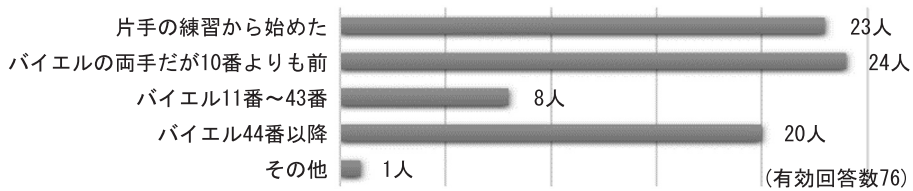
Q. あなたは今までに鍵盤楽器以外の楽器（バイオリンやフルート、箏など）や声楽を習ったことがありますか。



しかしながら、学生の入学前の音楽経験（特に鍵盤楽器の経験）が豊かであったかという点と必ずしもそうは言いきれない部分がある。[図2]は「音楽I」の最初のピアノのレッスンで採りあげた楽曲について尋ねた結果である。1人を除いてバイエルからはじめており、ピアノを習った経験はあまり役立っていないようにも思える。

【図2】「アンケートより(1)」

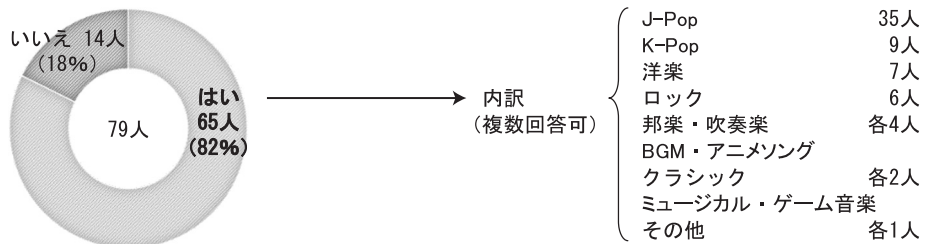
Q. あなたは最初のピアノのレッスンのとき、何から始めましたか。



その一方で、普段よく音楽を聴くかどうかとも尋ねてみたところ、82%の人が良く聞くと答えた【図3】。聴く音楽はJ-Popが最も多かったが、その嗜好は多岐に渡る。

【図3】「アンケート(2)」

Q. あなたはふだん、音楽をよく聴きますか。



これらの結果から、「ピアノを少し習ったがあまり上達はしていない、他の楽器の経験も乏しく、高校の時も芸術では音楽を選択しなかったが、普段いろいろな音楽をよく聴くため、必ずしも音楽が嫌い或いは音楽からは縁遠いというわけではない。」というのが本学の学生の平均像であることがわかった。

## (2) ピアノ学習への楽典の貢献度

昨年同様、「楽典の授業がピアノの練習に役立ったと思うか」について学生に意識調査を行った。【図4】はその結果である。この調査は入学4か月後に行ったものであるが、結果は昨年度と同様、高校で芸術音楽を選択していた者の方が評価は高かった。昨年度はその後「音楽Ⅱ」へと進み、入学9か月後の調査と比較したが、今回は鍵盤楽器を習ったことがある者（ここでは便宜的に「ピアノ経験者」と呼ぶことにする）とそうでない者（同じく便宜的に「ピアノ未経験者」と呼ぶことにする）とを比較してみた。結果は芸術音楽選択者とほぼ同様の傾向を示し、音楽経験のある人の方が、よりピアノの練習に役立てることができたと考えていることが分かった。

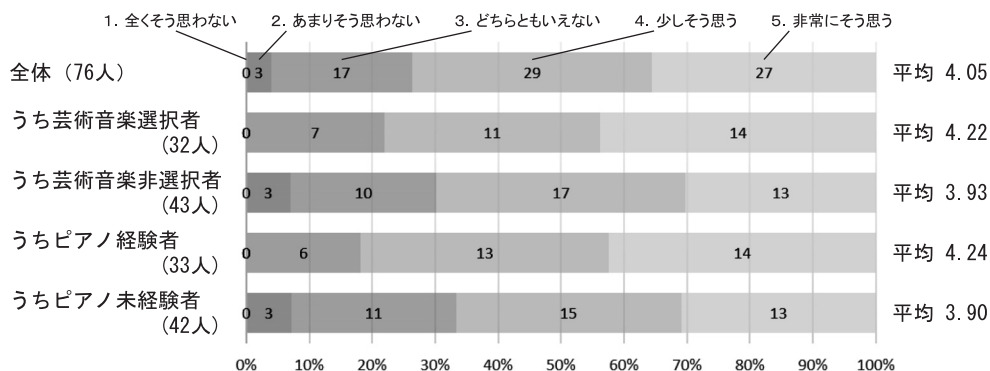
なお、昨年度の同様の調査では平均がおおよそ3点程度だったのに対し、今年の調査では全体



で約4点となった。これは4(1)の授業の内容で紹介した①②の工夫が、ピアノの練習に直接役立ったということを示唆するものと考えられる。一方で、昨年に比べると高校で芸術音楽を選択していた者とそうでない者との差が小さくなった。これは、昨年度よりも基礎的な内容に立ち返って指導カリキュラムを組み立てたことによる結果であると考えられる。

【図4】「アンケート(3)」

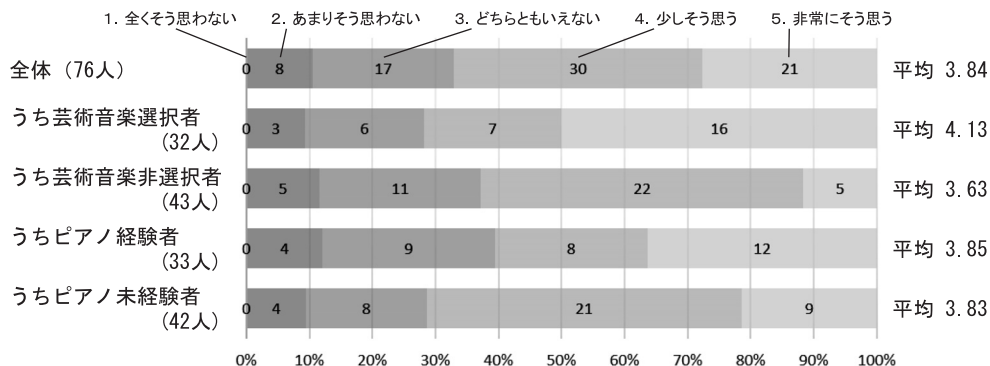
Q. 楽典の授業はピアノの練習に役立ったと思いますか。



次に、楽典の授業を受けてから、楽譜の読み方が変わったり、読む速度が変わったかどうかを調査した。これも主観的な質問であり評価が難しいところではあるが、ピアノ学習にあたって、作品を多角的に理解でき楽曲構造を意識できたかどうかをはかる尺度となると考えた [図5]。

【図5】「アンケート(4)」

Q. 楽典の授業を受けてから楽譜の読み方が変わったり、楽譜を読む速度が速くなったと思いますか。



ここでは高校で芸術音楽の選択をした者とそうでない者との間に大きな差が認められたが、一方ピアノの経験者と未経験者の間にはあまり差が見られなかった。高校での芸術音楽の授業内容と「楽典」の授業内容が結び付けられたときに、何か学生の感覚が変わるきっかけがあったと考えられる。なお、高校での芸術音楽選択者と非選択者との違いは、昨年と同様の傾向を示していた。今後の研究課題として残される。

### (3) 楽典の知識の定着度

楽典の知識の定着度についても昨年同様に調査を行ったが、今年度は授業前（入学時）に【譜例4】のような質問をして予備調査を行った。

#### 【譜例4】予備調査

Q. 次の問いに答えなさい。

- ① ア・イの音符は「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ」のうちのどれですか。
- ② ア・イの楽譜は何調だと思いますか。



正答率： ① ア 69人=87.3%， イ 1人=1.4%  
(79人) ② ア 6人= 7.6%， イ 3人=3.8%

①のアの正答率の高さを見ると、五線紙上で「階名」を読む能力は概ねもって入学しているといえる。しかしながら、イの正答率は極端に低く（「レ」という誤答が80.0%）、中学の学習指導要領<sup>[12]</sup>で「適宜」用いるようにとされている「移動ド唱法」はほとんど定着していないということがわかった。また、調号についての認識はとても低く②は正答率が著しく低かった。もちろん与えられた音符が「主音」（この言葉の意味を認識している可能性はかなり低いと考えられる）であることは明示していないので、②アをイ短調、イをへ長調と答えることも可能ではあるが、実際にはほとんど空欄で回答がなく、イを「へ長調」と答えたものは2名（2.5%）しかいなかった。

半年間指導した後、入学後4か月経った時点で、【譜例5】に挙げるような試験を実施し、「へ音記号をきちんと理解しているか」「調号をきちんと理解しているか」「階名が移動ド唱法で読めるようになっているか」という3点について確認をするとともに、学生がそれらの内容について、理解の度合いを正しく認識しているかどうかを調査した。

全体の正答率は①に対しては良好であった。「○長調」という名前はある程度なじみのある名前であったようで、理解度は高かった。②の正答率は全体の3分の1ほどであり、満足のゆ

く結果ではなかったが、[譜例4]の結果によれば入学時には全く理解できていなかった内容であるので、一定の成果が見られたといえることができる。

[譜例5] 試験問題 (例) 『あめふりくまのこ』(湯山昭作曲) より

Q. 次の楽譜を見て、後の問いに答えなさい。



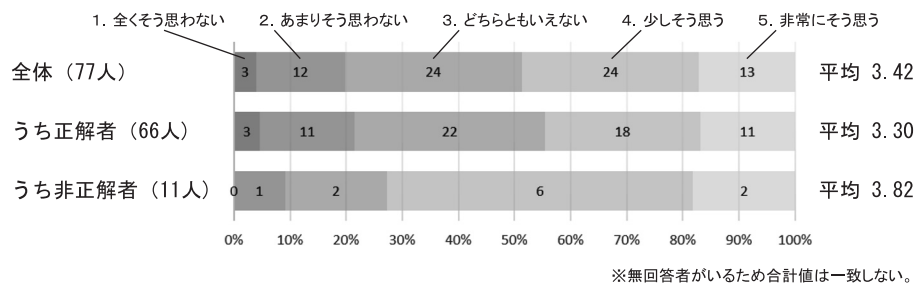
- ① この曲は何長調ですか。
- ② この楽譜を階名で読みなさい。

正答率 (全体77人) : ① 66人=85.7% ② 26人=33.8%

次に、これらの知識の定着度を学生が正しく認識し、評価をしているかどうかを調査した。[図6]は[譜例5]の①について、正解者と不正解者がそれぞれ自身をどのように評価していたかを調べたものである。

[図6] 「アンケート(5)」

Q. 楽典の授業を受けてから、低音部譜表がよく読めるようになったと思いますか。

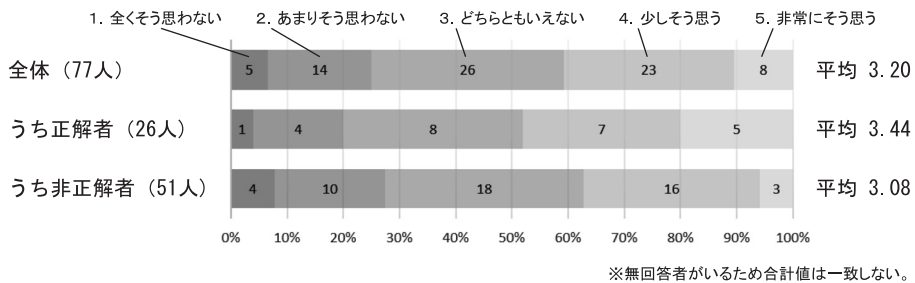


この結果を見る限り、正しく答えられた者とそうでない者にあまり意識の差はみられず、むしろ不正解者の方がきちんと理解していると認識している (つまりは誤解をしている) 傾向があるようである。

次の[図7]は[譜例5]の②について、正解者と不正解者がそれぞれ自身をどのように評価していたかを調べたものである。

【図7】「アンケート(6)」

Q. 楽典の授業を受けてから、さまざまな調の楽譜を階名で読めるようになったと思いますか。



こちらは、ほぼ妥当な結果が出ているが、【図6】の結果と併せて考えると、学生自身の自己評価は必ずしも正確なものではないと言わざるを得ない。このことは、学習内容をきちんと理解したと自信を持てるレベルに至っている学生は少なく、理解していたとしても、あやふやな部分が多いと感じているというのが平均的な学生の姿ではないかということを示唆している。

調号や階名をきちんと理解しているかどうかを確認する方法は、さまざまな階層で存在する。実際に【譜例5】で提示した楽譜を高音部譜表に書き直す問題も出題しているが【譜例6】、こちらの正答率は23.4% (18人) に過ぎない。また、ハ長調に移調した楽譜を書かせる問題の正答率はわずか15.6% (12人) である。

【譜例6】 試験問題 (例) 『『あめふりくまのこ』(湯山昭作曲) より』

Q. 次の楽譜を見て、後の問いに答えなさい。



③ この楽譜を1オクターヴ高くして高音部譜表に書きなさい。

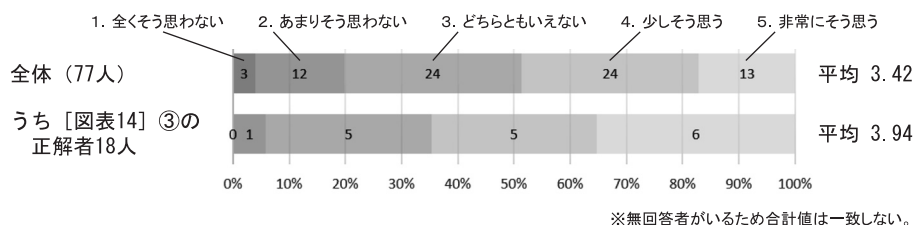
④ この楽譜をハ長調に移調して、低音部譜表に書きなさい。

正答率 (全体77人): ③ 18人=23.4% ④ 12人=15.6%

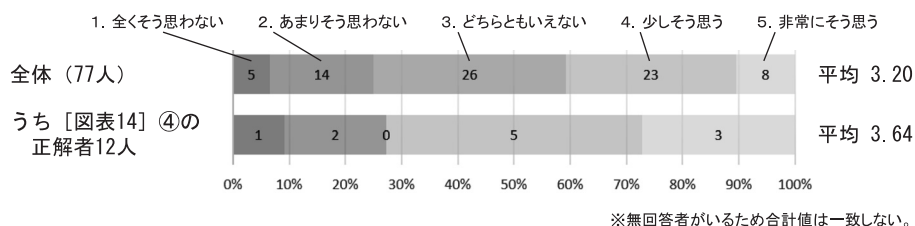
これらの問題の正解者についての認識は【図8】のとおりであり、こちらはほぼ順当な結果である。

[図8] 「アンケート(7)」

Q. 楽典の授業を受けてから、低音部譜表がよく読めるようになったと思いますか。



Q. 楽典の授業を受けてから、さまざまな調の楽譜を階名で読めるようになったと思いますか。



#### (4) 小括

昨年に引き続き楽典指導を通して行った本研究は、一定の効果があつたと考える。本年度は特に入学時の学生の知識レベルや音楽的経験をより詳細に調査することによって、昨年に比べ、より学生にとって取り組みやすいカリキュラムで指導ができたと考える。学生たちはこれらの経験によって、さらにバイエルをはじめとしたさまざまな楽曲の理解を深め、さらにそれがより豊かな音楽表現の習得が可能になることが期待できる。

一方、より確実な知識の定着には、演習の繰り返しと学習者の能動的な姿勢が不可欠である。本年度は前期の「音楽Ⅰ」の限られた時間の中での指導であつたので、今後、「音楽Ⅱ」や「音楽表現技術」などの演習にうまく受け継ぎ、その中で学習者が能動的に学ぼうとすることができる教材、現実に必要なスキルを習得するために考えられる教材を厳選して適切に指導を継続していくことが必要になる。

## 6. 総合的考察と今後の課題

2018年度は、「音楽Ⅰ」の楽典授業においては、昨年度に比べ授業時間数が減ったが、昨年同様「バイエルの楽譜を読むことができる基礎知識の習得」「バイエルの楽譜に表されている基本的な音楽的内容を理解し表現に生かす」ことを目標とした。このように「楽典の授業」においては、「バイエルの楽譜」に特化し、そこに付随する内容として、関連する様々な音楽表現についての基礎知識・技術を指導するようにし、その学習を通してより効率的なピアノ学習に寄与することを心掛けた。

その結果として、「音楽Ⅰ」の授業における楽典教育は、昨年よりも、時間数が減った限られ

た環境にもかかわらず、昨年時と同様、次のような成果を得ることができたといえる。

- ① ピアノ学習の前提として必要な読譜の基礎知識の理解を助けた
- ② 学生の音楽的な興味・意欲をある程度引き出した
- ③ 音楽表現をする上での前提となる楽譜の理解を促した

限られた時間数の中で効率よく指導し、教育効果を高めるといえる成果はあったものの、学生のピアノ技術・音楽への興味・音楽経験の違いなどの個別のレベルへの対応はまだ不十分であると考える。

音楽表現を言語による感情表現に例えるのであれば、言語における文法の習得が音楽における楽典の理解に相当する。豊かな音楽表現を実現するためには、楽典の習得とより多くの音楽体験が必要である。感情のひだのきめ細かさは、その人の持つ語彙の数が多きほど繊細になるのと同じように、より良い音楽に多くふれることは、より豊かな音楽的欲求を学習者に与えることになる。

また、リズム的な要素についての試みはまだ不十分であるので、次年度は少しリズムのスキルアップを図る教材も研究していきたい。集団授業という制約はあるものの、本研究の成果を踏まえ、今後さらに魅力的、実用的な指導を研究し、実践していきたい。

教材としては、バイエル以外のピアノメソッドや、子どもの歌などの生きた教材からバイエルに欠けている音楽的要素を取り入れたり、流行歌曲など、現代の学生が興味を引く音楽の中に素材を求めるなど（楽典の内容が基礎的であるがゆえに利用できる素材に限られるのが難点ではあるが）、より楽譜や音楽を学生に身近に感じてもらい、必要な音楽スキルの習得に役立てるようにしたい。

## 【文献】

- [1] 矢内淑子, 酒井国作, 藤田桂子, 夏目佳子, 鷺見千鶴, 久野明子 (2018) 「保育士・教員養成課程における楽典指導～『音楽Ⅰ』・『音楽Ⅱ』のピアノ表現を深めるために～」『東邦学誌』第47巻第1号, pp.99-109.
- [2] 河原田潤 (2015) 「保育士・幼稚園教諭養成系における『音楽理論』の必要性と授業展開についての一考察」『常葉大学短期大学部紀要』46号, pp.129-138.
- [3] 高御堂愛子 (2010) 「保育者養成における音楽教育の今日的課題を探る－東海学園大学人文学部発達教育学科第一期生の実態調査より」『東海学園大学研究紀要』文学・健康科学研究編 (15), pp.189-207.
- [4] 前田菜月 (2017) 「音楽学習教材における一考察～音楽学習者のための楽典の教材に着目して～」『目白大学高等教育研究』(23), p.97～103.
- [5] 「幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定子ども園教育・保育要領<平成29年告示>」、チャイルド本社
- [6] 横山真理 (2017) 「主体的な学びを促す『保育の表現技術』科目系列の音楽授業改善の要点－『楽典』に関する授業実践の省察を通して」『東海学院大学研究年報』2, pp.161-171.
- [7] 小林美実編「こどものうた200」チャイルド本社, 1975.
- [8] 「トンプソン現代ピアノ教本」全音楽譜出版社, 1972.
- [9] 「バーナムピアノテクニク1」全音楽譜出版社, 1975.
- [10] 「バスティンピアノベーシックス、レベル1 (日本語版)」東音企画, 1989.
- [11] 「標準バイエルピアノ教則本」全音楽譜出版社, 1955.
- [12] 「中学校学習指導要領解説<平成29年告示>」文部科学省

受理日 2019年9月30日